

技術のあゆみ(20年史)発刊にあたって

専務取締役 野澤 興一



論語の中で孔子は温故知新の言葉で古いこと、昔のことを研究して、そこから現在や未来に生かせる新しい知識や意義を見出すことの大切さを説いており、この思想は古今東西に共通するものです。

従って今度の技術史の編集により、先達が残してくれた企業文化の源流を明らかにし、また私達がその企業文化をどのように発展させてきたかを見つめて、私達が今後進むべき将来方向を展望することは意義深いことだと考えます。

さて、企業は商品の開発・製造・販売の活動を通して社会からその価値を評価されながら存続していますが、その商品の血となり、肉となるものが技術の開発と蓄積であります。この技術は企業文化の中で育まれていく一方、企業文化もこの商品開発の経験を通して大きく変化成長していくものです。

開発に情熱を傾ける技術者は、その情熱を大切にする企業文化の中で、大いにその力が生かされます。また企業文化の価値を認識して生き生きと活動する人材が多数いれば、積極的・先進的に指向する環境は自ら醸成されるものです。

以上の観点から、当社の企業文化の源流を知るために、当20年史の内容は神戸工業時代の先達の活動までさかのぼって編集されています。

昭和22年にスーパー受信用真空管6WC5の開発、25年にわが国初めてのシリコンダイオードの試作着手、更に28年には接合型ゲルマニウムトランジスタの試作に成功しています。このように真

空管、半導体等のエレクトロニクス素子分野で常に最先端の研究開発をして業界を先行した先輩達の心意気が強く感じられます。

28年にトヨタ自動車工業殿から提示された「技術コンクール」に敢然と挑戦して、ラジオ事業化の機会をとらえています。上司と部下が心を一つにして、技術の壁を突破したロマンがあり、そこには先輩達が築き上げた不撓不屈の精神が見られます。

これらの伝統は平成元年に世界に先駆けて商品化したDSP方式による車室内音場制御装置α5000Pの開発にも片鱗をみることができます。モートロニクスは事業の種をまいて20年経過し、会社を支える柱として成長しましたが、社会のニーズを着実にとらえて、先進技術を追い続けた先輩達の努力が実を結んでいます。

商品の開発は常に失敗と成功の連続でありましたが、そこには先輩達が残してくれた誇りにできる開発精神が強く感じられます。またこの技術史には現在第一線で活躍している技術者による最近の商品開発に関する出来事も書かれていますが、この記事を通して、私達が伝承して発展させてきた企業文化を後輩に残すことになります。

最後になりますが、当社の商品は、21世紀に向けて、自動車産業のAV・通信・モートロニクスの分野に統合的に展開する転機を迎えています。今後とも業界を、更には世界をリードする技術によって社会発展に貢献する企業文化を一步一步築いていくことを心から祈念いたします。